漢語山西方言声調の研究

【論文要旨】

本研究は漢語北方方言に属する山西方言の声調の性質とその音韻的・音声的変化過程及び地理的推移過程を考察するものであり、言語地図を描き俯瞰的な視野から検討する言語地理学的研究とフィールドワークによって得られた資料を微視的に比較検討する音響音声学的研究の二つの研究手法を主柱としたアプローチを行う。

山西方言は中国語方言全体の中では、より新しい音調特徴を有する北方方言に属するが、北方方言内部の中で見ると、保守的な特徴を多く有する方言群となっており、特に現代標準中国語の基礎となる北京方言との地理的な近接性もあり、北方方言の史的変遷を解明する上で重要な位置付けにある。また、東アジア全体の音調特徴の分布を視野に入れるならば、ストレスアクセントの発達や声調の簡素化・消失の過程を考察する上で重要となる。

本論ではそのような山西方言の位置付けを念頭に、漢語音韻史上における声調の変化過程の解明と声調の言語普遍的な特質の解明という二つの課題を中心として研究を進めていく。

第一章では中国語における声調の通時的研究の前提を概観し、声調に関する内的変化・外的変化および言語地理学的研究に関する先行研究について触れた後、東アジア全域を視野に入れた音調の地域的特徴の推移の中で山西方言研究の有する意義を述べ、研究の目的を明らかにする。

論文本編は単音節声調編と二音節声調編からなり、それぞれ山西方言全体を含む範囲で言語地図を描き、山西方言と近隣方言との関連を示し、マクロなレベルでの声調の変化過程を解釈する言語地理学的研究と、北方方言全体の声調の推移にも関わる重要な特徴が多く見られる山西東南部に焦点をあて、フィールドワークを行いその音響特徴や音韻規則を比較検討することにより、詳細な変化過程を跡付ける音響音声学的研究を行う。

研究の視点としては特に調類の合流に着目して声調変化の過程を跡付け、また単音節と二音節における変化の共通性と差異、変調の条件や規則などについて調形と調高を分離して考察する点、また大規模な世代差調査を行い、変化の過程をピッチ曲線や聴覚実験によって裏付けて行く点などに、先行研究においてはまだあまり見られない独自の特徴を有している。

第二章では山西省及び近隣地域における声調調値の分布地図を作成し声調の地理的分布の形成過程とその推移について考察する。本章は前後二編からなり、前編では主に山西省内の状況について入声の分布を軸に考察し、後編においては舒声の分布について分類基準を詳細にし、範囲を近隣にまで拡大して考察する。

前編ではまず山西省内における入声の調形・調高の分布を描き、その変化過程について特

に次濁入声の陰陽調帰属に着目して考察する。山西省の入声保存地域の内、西部から中央部・東南部一帯では入声が陰調と陽調に分化するが、次濁声母を有する入声（次濁入）が陰調と陽調のどちらに帰属するかによりさらに類型が分かれる。その調類分合と調値の分布状況を見ると、次濁入が相対的に低い調類を選ぶ傾向を示すことが明らかとなり、その分布は山西省の省都太原を有する中央部を中心として ABA 分布を形成する。他の調類の分布状況にも同様の ABA 分布が観察される事から、中央部で声調体系が革新され、西部と東南部の連続が分断されたものと解釈できる。中央部での声調体系の革新には陰入と陽入を区別する弁別特徴の変化や、西南部の声調体系からの影響が関与したことが推測される。比較言語学的な観点から見ると、次濁入の陰調帰属が陽調帰属より革新的な音韻変化である点において、中央部での革新が支持される。

また、山西内部における次濁入声の分布状況は言語分布の境界線上における保守的特徴と革新的特徴の共存の一例を示している。

第二章後編では、山西省とその周辺地域に及ぶ舒声の分布状況を描き、山西方言と周辺方言との関連を考察する。分析には既存の方言報告から得られる五度制調値を用いるが、調形と調高を分離し、分類基準を詳細にすることで声調が地理的・音声的に連続的に推移する過程を明らかにする。

調形・調高の地理的分布状況は調類によって様々だが、山西西南部と陝西関中を中心とする一帯、山西中西北部から陝西北部一帯と山西中央部および山西東南部一帯、山西西北部一帯、河南河北の中原地域一帯、という具合に分布に一定のまとまりが見られる傾向がある。特に清平と清上における山西全体に及ぶ調形の類似的な分布傾向と、第二章前編でも指摘した中央部を中心とした ABA 分布の傾向が特徴的である。

各調類の調形の分布状況を見ると、平板調と上昇調の分布の中間には緩上昇調が分布し、上昇調と下降調の分布の中間には下降上昇調が見られるというように、異なる調形類型の分布境界付近には両者の中間的な調形が分布する傾向が見られ、調高についても同様に、高・中高・中・中低・低と連続的に分布が推移する傾向が認められる。

また北方方言全体における調形と調高の関係として、平板調は高調、下降上昇調は低調となる傾向が強く、調形変化と調高変化は大局的には連動している可能性がある。しかし一方で調形と調高の分布状況には基本的にずれが生じており、調形と調高がそれぞれ独立に変化していることがわかる。

声調の分布に一定の地域的なまとまりが見られ、かつ異なるタイプの声調の分布境界付近に両者の中間的な型が存在する状況は、声調が変化する際に、外部方言からの影響と内部体系における調節の双方が働いていることを示唆している。

山西東南部は北方方言における主要な声調体系の分布境界地域の一つであるが、北方方言最多の単字調七声調体系が見られる一方で、大規模な声調簡素化が進行し、山西方言最少の

三声調体系も見られる。第三章では特に多様な合流類型が見られ、声調変化の動態を観察するための好条件を備える沁源県近隣において地点密度を高めた単字調調査を行い、声調曲線に基くミクロなレベルで声調変化の過程を考察し、ピッチ曲線が地理的に連続的・漸進的に変化していることを示す。

さらに調類の合流後と合流前の体系を比較し、合流後の体系における調形の自由変異形には合流前に存在したと推測される二種の調形に近いものが見られる一方で、合流前の体系においても両調類の自由変異形として相互に接近した調形が見られること、さらにその合流形には双方の調形を合わせたような調形も存在していることを指摘する。

第四章では三種の声調合流様式の交錯地帯となる沁源県交口郷において単字調の世代差調査を行い、この地域において調類合流が実際に進行していることを示し、変化の方向性を明らかにする。また聴覚実験によって、合流の進む調類間の弁別成績が悪いことを示し、聴覚面からも合流が進行すること裏付ける。その上でピッチ曲線の分析によって世代間における声調変化の過程を考察する。

単字調の世代差調査からは、交口方言の調類は老年層では七声調を区別していたと考えられるが、清去・濁去の合流は老年層でほぼ完成し、清入と濁入、清上と清平、清平と濁平の合流が平行して発生していること、清入と濁入の合流は若年世代ではほぼ完了し、清平・濁平の合流も増加傾向にあること、清平・清上のみの合流は若年世代では一旦減少するが清平・濁平・清上の合流する新たな変化が進行していることなどが明らかとなる。

さらに交口郷において 45 人を対象とし、AX 法による聴覚弁別調査を行い、合流の進行する清平と濁平、清平と清上、清去と濁去、清入と濁入の組で弁別率が 60%以下となり、合流の進まない清平と濁去、濁平と濁去、清上と濁去及び同一声調の組の 90%以上と比べ有意に低いことを示し、聴覚面からも合流が進行することを裏付ける。

各世代の調値のピッチ曲線に基く分析からは、各調とも前世代の特徴を引き継ぎながら連続的に変化していることが明らかとなるが、必ずしも一方向の変化とは限らず、相反する方向への変化が同時に出現する場合もある。それらは自由変異的に出現する傾向を有しており、調類合流の進行による調形の混乱と見ることも可能だが、一部については合流が進行する方向への変化と合流を避ける方向への異なる変化が反映されている可能性もある。

また、合流の進行とともに合流先の調類の調形との相互接近が見られ、結果として双方の特徴を兼ね備えた調形が出現する場合がある。さらに、平板化していく傾向も見られるが、それは合流によって生じた余剰な特徴をそぎ落としているものとして理解することができる。

第五章では山西方言に見られる二音節前字変調の主要な類型を概観した後、変調調形について調類分合型を分けて地図を作成し、単字調調形および単字調合流の地図と重ねあわせ、その関連を考察する。

山西省内における前字変調の変調類型は合流の有無によって合流型・分化型・非合流非分化型に分けることができるが、その他にも清平と清上が後字となる場合に前字に対して共通の変調をもたらすタイプが東部から東南部を中心に分布し、清平と清上の接近過程の一側面をなすと考えることができる。

前字変調の地理的分布の状況からは、特に単字調において合流の進む清平と濁平及び清平と清上において単字調と前字変調の同一調形が地理的に連続して分布する傾向が示される。また西北部などを中心に単字調では同一の調形であっても前字調では異なる調形となって分布する場合が見られ、単字調におけるかつての分布状況の違いが前字調の分布に反映されていると考えられる。

清平と清上の単字調形は、山西全般において類似した分布傾向を示すが、前字調調形についても両調類で類似した分布傾向が看取される。濁平・去声の前字調の分布は清平・清上と比べ分散的となるものの、舒声全調類の前字調の分布を通して中部には平板調が、東南部には上昇調が多く分布する傾向が見られる。このことは、これらの地域において単字調調類の合流が多角的に進み、単字調の調形にも接近・画一化が見られることなどと合わせ、声調簡素化の進行を示すものと考えられる。

第六章は前後二編からなり、それぞれ山西東南部における二音節声調の実態と変化の過程を現地調査の結果に基き考察する。前編では、単字調において七声調体系を有する長治故南方言と清平と濁平、清入と濁入で合流の進む沁源王陶方言の二音節声調の体系を、特に高低の差を重視して比較分析し、両方言の変調・合流の背景に存在する規則と変化の方向性を考察する。結論として、大きく異なる声調体系を有する両方言であるが、二音節調に見られる変調・合流には共通性もあり、「高調連続の回避規則」、「低調連続の回避規則」、「清平・清上・清入が隣接音節となる場合に共通する変調規則」によってその多くが解釈可能であることを指摘する。

第六章後編では王陶と故南の中間に位置する沁源交口方言の三世代の二音節声調において、特に調形を重視した分析を行い、二音節内における音節の位置と隣接する調類が調値に与える影響の世代間における異同を考察するとともに、王陶・故南方言との比較を行う。

交口の二音節調の世代間の共通点として、去声に前接する全ての前字調において特に音節後半部の調高の低下が見られる点、去声の調形が音節位置によって異なる傾向を有し、後音節及び去声前に於いて下降調が強く出現するが、その他の場合には下降的特徴が弱化する点、清上に前接する前字調の清平と濁平に上昇調が出現する点、清平・濁平・清上の調形の接近・合流が挙げられ、差異としては、清平と清上に見られた共通変調の弱化があげられる。交口方言の二音節調の変調規則や合流状況についても故南・王陶両方言との共通性が見られる一方でその適用範囲や様式は異なっており、それぞれの方言において二音節声調を実現するための個別の調整を行っていることが伺われる。

第七章では、沁源県交口方言の二音節前字調の世代変化をピッチ曲線に基き考察する。まず、二音節語の最小対の調査によって世代間の前字調における調類合流の進行状況を明らかにし、その上でピッチ曲線の世代間における変化の過程について考察する。前字調におけるピッチ曲線の世代間変化には単字調に先行するものも一部見られるが、基本的には単字調と同様の変化様式を有しているものと考えられ、世代間でピッチ曲線が一定の共通部分を持ちながら連続的に変化している。一方で単字調と前字調の変化過程には差異も存在し、単字調では自由変異的に出現していた調形が、前字調の場合は後音節の調類を条件として条件変異的に出現する傾向が見られる。これは同一の調値が潜在的に有する異なる方向への変化の可能性が単字調においては調類合流の進行・回避等の要因によって自由変異的に顕在化したのに対し、前字調においては音節位置や後続音節の調類等の影響によって顕在化したためとして解釈することができる。

第八章では本研究の成果と今後の課題をまとめる。

本研究は声調の通時的・地理的推移と音韻的・音声的変化過程の解明を中心課題として、山西方言を例に言語地図による俯瞰的な視点と、ピッチ曲線に基く微視的な視点から議論を進めた。

研究の結果として、山西近隣における声調の分布状態、調形と調高の関連性と独立性、声調の変化の地域間・世代間における連続性、調類合流の進行とその方向性、ピッチ曲線の変化過程、単字調と二音節調の地理的分布における関連性およびその声調変化過程の異同、二音節調における声調調整規則等を明らかにした。

論文全体の総括として、声調の変化が体系内部に存する内的要因と方言接触による外的要因双方の調整の下に進んでおり、その変化の過程は多様で方向性についても一様とは限らないが、声調の簡素化という背景が山西省の声調変化に見られる多様な方向性を集約する上で重要な役割を果たす事を述べる。

本研究によって今後の議論の土台とすべき事柄の一端を提示したが、入声の舒声化や軽声の発達といった漢語音韻史上の重要な問題も多く積み残されている。

声調の本質を理解し、漢語方言全体に及ぶ声調の通時的変遷過程を解明するためには、声調に影響を及ぼす他の言語学的要素（たとえばイントネーションや多音節化、語頭子音や母音などの分節音に関する特徴）との関連についても研究を進めていく必要がある。同時に、本研究によって得られた内容が他の漢語方言や異なる言語について言語普遍的に当てはまるのかどうかを検討し、声調がストレスアクセント等の他の音調類型とどのように関わり、どのように推移していくのかといった議論にも役立てて行きたいと思う。